

スポーツ・マイノリティに関する研究

—男子高校生のジェンダー・スポーツへの社会化—

野川暁弘*

工藤康宏** 太田あや子***

抄録

近年、男性スポーツと見なされてきたボクシングやラグビー、柔道、サッカー等の近代スポーツへの女性の参加増加は、目覚ましいものがある（佐伯，1997）。スポーツ種目にはボクシングやラグビーなどの「男らしい」スポーツと新体操、チアリーディングなどの「女らしい」スポーツがあり、これらをジェンダー・スポーツと称することができるであろう。そして、女性のジェンダー・スポーツに関する社会化研究は進んできた。

一方で、男性をジェンダー・マイノリティとして捉えた社会化研究は日本では極めて少ないのが現状である。したがって、ジェンダー・マイノリティに関する基礎資料の収集と実態の把握が必要である。

本研究では、ジェンダー・スポーツに参加している男子高校生の実態を把握し、彼らのジェンダー・スポーツ参加過程と参加に至る要因について明らかにすることを目的とした。調査は、全国の高校男子新体操部を対象に質問紙調査を行った。

主な結果として、ジェンダー・スポーツへの社会化における重要な他者は、年齢によって異なり、約10歳までの重要な他者は、「異性の両親（母親）」や「同性の兄弟」であった。ティーンズ以降は、「部活の指導者」や「部活仲間」であることが明らかとなった。また、ジェンダー・スポーツへの参加過程は、「流出（スピルオーバー）」が6.9%（n=16）、Transfer 93.1%（n=216）に2つのタイプ分類され、Transfer が占める割合が高い傾向にあることが示唆された。また、Transfer の中には、再社会化と考えられるサンプルが6.9%（n=16）存在することが明らかとなった。

これらの結果より、当初のスピルオーバーが生じる学校期と設定した小学校から中学校への進学時期を、中学校から高校に進学する時期に変更する必要があることが示唆される結果となった。また、ジェンダー・スポーツへの参加過程においては学校期の運動部活動が影響を与えていることが推察される結果となった。

キーワード：スポーツ・マイノリティ，男子高校生，ジェンダー・スポーツ，社会化過程

*順天堂大学大学院 スポーツ健康科学研究科 〒270-1606 千葉県印西市平賀学園台1-1

**順天堂大学 スポーツ健康科学部 〒270-1606 千葉県印西市平賀学園台1-1

***武蔵丘短期大学 〒355-0154 埼玉県比企郡吉見町南吉見111-1

Research on Sports Minorities

—Socialization of the high school boys of gender Sports—

Akihiro Nogawa*

Yasuhiro Kudo**

Ayako Ota***

Abstract

In recent years, women's participation in modern sports such as boxing and rugby, judo, soccer etc., which has been regarded as male sports, is remarkable (Saiki, 1997). Sport events include "masculine" sports such as boxing and rugby, "rhythmic gymnastics", "feminine" sports such as cheerleading, and these could be referred to as gender sports. Socialization research on women's gender and sports has advanced.

On the other hand, socialization studies that regard men as gender minorities are very few in Japan at present. Therefore, it is necessary to gather basic data on gender minorities and grasp actual conditions.

In this research, we aimed to grasp the actual condition of boys high school students participating in gender sports, to clarify the factors leading to their participation and participation in gender and sports. In the survey, a questionnaire survey was conducted for high school men's rhythmic gymnastics department nationwide.

As a main result, important others in socialization to gender sports vary by age, important others up to about 10 years old are "heterosexual parents (mothers)" or "same-sex brothers" It was. After teens, it became clear that it is "leader of club activities" and "club activities club." In addition, the process of participation in gender / sports is classified into two types "spillover" by 6.9% (n = 16) and Transfer 93.1% (n = 216), and Transfer occupies a high proportion It was suggested. In Transfer, it became clear that 6.9% (n = 16) of samples considered to be re-social existed.

From these results, it was suggested that it was necessary to change the time to enter the junior high school from the elementary school set as the school term where the initial spillover occurred, from the junior high school to the high school. In addition, in the process of participation in gender and sports, it was conjectured that the exercise department activity at the school term had an influence.

Key Words : Sport minorities, high school boy, gender and sports, socialization-process

* Graduate School of Health and Sports Science Juntendo University

1-1, Hiragagakuendai, Inzai City, Chiba, Japan, 276-1695

** Juntendo University

1-1, Hiragagakuendai, Inzai City, Chiba, Japan, 276-1695

*** Musasigaoka College

1-111, Minamiyoshimi, Hikigunyoshimichou, Saitama, Japan, 355-0145

1. はじめに

近年、ジェンダーの垣根が低くなり、これまで男性スポーツと見なされてきたボクシングやラグビー、柔道、サッカー等の近代スポーツへの女性の参加の増加は目覚ましいものがある（佐伯，1997）。スポーツ種目にはボクシングやラグビーなどの「男らしい」スポーツと新体操、チアリーディングやシンクロナイズドスイミングなどの「女らしい」スポーツがあ（佐伯，1997）、これらをジェンダー・スポーツと称することができるであろう。これらのジェンダー・スポーツに参加する者は、スポーツ・マイノリティと呼ばれる少数派であり、時にTomboy/Sissyと呼ばれ揶揄される傾向にある。

ジェンダーという概念が生まれたのは、1970年代のフェミニズム運動からである（飯田，2011）。それ以降、性差をめぐる議論はセクシズムとジェンダーとを区別し、性差は宿命として変えられないものではなく、「女性らしさ」に縛られない女性の生き方が可能であると宣言したことが始まりである（江原，2001）。現在では、ジェンダーの概念も「単なる性別としてのジェンダー」、「社会的性別・性質としてのジェンダー」、「規範および参照枠組みとしてのジェンダー」など多様になっているが、このような一連のジェンダー・フェミニズム研究の進展と共に、社会全体における女性の社会的地位も向上してきた。また、ジェンダーの概念は、これまで不可能であると思われていた女性の可能性を押し広げる存在であるともいえる（江原，2001）。

社会学では、ジェンダーがもたらす差別や抑圧を片方の性からだけでなく、より一般的な視点から捉える必要があるとしている（江原，1995）。このことから、男性もまたジェンダー・マイノリティの対象と捉えることも重要な問題であるとしている。近代スポーツは「男らしさ」の象徴的な文化として男性によって推進されてきた（飯田，2011）が、フェミニズムが提唱され始めて以降、様々な要因により女性による近代スポーツへの参加が増加した。

日本においても女性に主眼を当てた女性スポーツの文献、女性スポーツとジェンダーに関する研究は伊藤（2006）をはじめ、飯田（2003）や井谷（2001）らによって進められてきた。

だが、男性をジェンダー・マイノリティとして捉えた社会化研究は日本では極めて少ないのが現状である。

海外でも、女性的スポーツ（新体操）に参加する若い男性の両親や家族とのコミュニケーションや関係など男性的なアイデンティティの構築に関する研究（Caroline，2010）や、ジェンダーステレオタイプにおける児童期のスポーツ参加決定要素に関する研究（Tuero,2014）などしかない。したがっ

て、男性を対象としたジェンダー・マイノリティに関する実態と基礎資料の収集が必要であると考えられる。

2. 目的

本研究は、ジェンダー・スポーツに参加している男子高校生の実態を把握し、彼らのジェンダー・スポーツ参加過程と参加に至る要因について明らかにすることを目的とした。

3. 方法

3.1 結果の予測

1. ジェンダー・スポーツへの社会化における重要な他者は、年齢によって異なる。具体的には、約10歳までの重要な他者は、「同性の両親」または「同性の兄弟」だが、ティーンズ以降は、「部活の指導者」や「外部指導者」、「部活仲間」となる。

2. ジェンダー・スポーツへの参加過程として、流出（スピルオーバー）とTransferの2つのタイプに分けられる。

3.2 調査対象

調査は、女性競技者の競技人口が多く、男性競技者が少数であるスポーツ・マイノリティのスポーツをジェンダー・スポーツの判断基準とし、男新体操とエアロビクスに登録している男子高校生を研究対象とした。

3.3 調査方法

調査は、郵送法による自己記入式の質問紙調査を実施した。各団体に本研究者が直接訪問して調査の趣旨を説明したうえで、郵送法調査を依頼した。調査協力の承諾のとれた団体より提供されたチームや指導者に対し、改めて調査用紙と依頼文を添えて質問紙を送付した。

調査手順は、調査用紙を全国の男子新体操部（591名）に、部活動の顧問教師または指導者を通じて生徒・選手へ配布、記入、記入後に顧問または指導者が回収し、予め用意された返信用封筒で質問紙の回収を行った。（2016年9月12日～24日）

質問紙は総配布数591部、回答数235部、回収率40.0%であり、回答に不備が多くみられた質問紙を除いた232部を有効回答とし、分析を行った。

3.4 調査項目

本研究の調査項目は、川辺（1981）の一流競技者の社会化に関する研究から各年齢期の「スポーツ参加歴」や「社会化エージェント」、「競技を本格的に始めた理由」に関する4項目を援用した。回答方法は、幼少期から高校生までの各年齢期の「スポーツ

参加歴」、「所属団体」、「影響力が強かった他者」について回答選択肢から2つまで選択し、「競技を本格的に始めた理由」については複数回答させた。

『競技の魅力に関する項目』は、競技ルールなど男女の新体操の違いやエアロビク連盟からのヒアリングから設定し、「男性らしい」や「華やかさ」などの表現を加えた。『競技の普及・振興に関する項目』は、各競技の組織関係者から普及・振興に関して力を入れている事業などをヒアリングして項目を設定した。競技の魅力と競技の普及・振興の調査項目への回答は、「1.全く同意しない～6.とても同意する」までのリッカート法を用いて6段階の等間隔スケールとみなし、項目を設定した。

『現在の活動状況に関する項目』は、主に1週間の練習回数や時間、高校入学後の大会出場回数、ケガの有無や年間にかかる費用などスポーツ白書(笹川スポーツ財団, 2012)を元に項目を設定した。さらに、個人的属性として、学年、身長や体重の体格、居住地域、現住居、同居人の5項目を設定した。なお、質問紙の構成、質問項目、回答方法の妥当性については、武蔵丘短期大学の太田あや子教授と協議しながら確認した。

表1. 調査項目

No.	調査項目	項目内容	引用元	
1	各年齢期に主に参加してきたスポーツ種目	スポーツ参加歴	川辺(1981)	
2	各年齢期に所属してきた場所または団体	社会化環境		
3	各年齢期に影響が強かった人	重要な他者		
4	各競技を本格的に始めた理由	重要な他者		
5	各競技の魅力について	ジェンダーについて		
6	進学理由		オリジナル	
7	練習日数と時間	競技成績		
8	大会出場回数			
9	けがについて			
10	年間費用			
11	家族からの経済的なサポート			スポーツ青年白書(2012)
12	家族からの日常生活のサポート			
13	家族からの食事(栄養)面のサポート			
14	学校からの施設面のサポート			
15	学校からの指導面のサポート			
16	学校からの経済的なサポート			
17	各競技組織からの施設面のサポート			
18	各競技組織からの経済的なサポート			
19	各競技組織からの経済的なサポート			
20	より男性的なアクロバティックな演技に変更すべき	希望するサポートについて	オリジナル	
21	シンプルな衣装にするべき			
22	芸術性を追求すべき			
23	芸術性よりも男性らしい力強さとアクロバティック演技を採対象とするべき			
24	テレビなどのメディアを通して魅力を広く伝えるべき			
25	男女共通のルールに統一し、男女混合競技にするべき			
26	採点方法の上限を取り払うべき			
27	国際大会を増やし、各競技を普及すべき			
28	今後の競技予定・計画			今後の競技継続意志
29	学年			個人的属性
30	身長			
31	体重			
32	居住地域			
33	現在の住まい			
34	同居人			

4. 結果及び考察

4.1 スポーツ参加歴

幼稚園/保育園の頃のスポーツ参加は、「やっていない」と回答したサンプルは52.0% (102名)で最も多く、次いで、「水泳」14.8% (29名)、「器械体

操」10.7% (21名)、「サッカー」9.2% (18名)、「新体操」3.6% (7名)であり、幼少期からスポーツを始めたサンプルは少ない傾向にある。その他の種目として、テニスや陸上教室などの回答が見られた。

小学1-3年生の頃のスポーツ参加は、「水泳」と回答したサンプルが21.8% (47名)で最も多く、「やっていない」21.3% (46名)、「サッカー」12.5% (27名)、「器械体操」10.2% (22名)「新体操」9.3% (20名)、「空手」が6.0% (13名)の順であった。小学4-6年生になると、「新体操」「サッカー」と回答したサンプルが15.6% (35名)であり、次いで人気スポーツの「野球」13.8% (33名)、「水泳」12.4% (28名)、「やっていない」9.8% (22名)、「器械体操」7.1% (16名)の順であった。

中学生に進学すると、「新体操」と回答したサンプルは倍増し31.0% (71名)で最も多く、次いで「サッカー」11.4% (26名)、「野球」10.0% (23名)、「バレーボール」8.3% (19名)の順であった。また、高校生に進学すると、「新体操」と回答したサンプルが98.7% (227名)であり、現在の競技種目に至っている。

川辺(1981)によるとプロスポーツ選手は、小学校1-3年生頃頃から本格的に種目を始めると報告されているが、本研究では、小学4年生以降、特に高校生になってからジェンダー・スポーツに参加する傾向が見られた。

表2. 各年齢期におけるスポーツ参加歴

年齢期	種目	小学校1年生		小学校2年生		小学校3年生		小学生		中学生		高校生		合計
		%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	
幼稚園 保育園	新体操	3.6	7	9.3	20	15.6	35	31.0	71	0.4	1	0.4	1	220
	器械体操	10.7	21	10.2	22	7.1	16	5.7	13	0.4	1	0.4	1	
	サッカー	9.2	18	12.5	27	15.6	35	11.4	26	0.4	1	0.4	1	
	野球	0.0	0	7.4	16	13.8	31	10.0	23	0.4	1	0.4	1	
	水泳	14.8	29	21.8	47	12.4	28	3.9	9	0.4	1	0.4	1	
	卓球	0.5	1	0.9	2	0.4	1	2.6	5					
	バスケットボール	0.5	1	1.9	4	4.9	11	7.4	17					
	柔道	0.5	1	1.9	4	3.1	7	3.9	9					
	剣道	0.5	1	1.4	3	1.3	3	2.6	6					
	空手	0.0	0	6.0	13	5.8	13	2.2	5					
	ダンス	1.0	2	0.9	2	0.0	0	0.4	1					
小学生	バレーボール	1.0	2	0.0	0	1.8	4	8.3	19					
	やっていない	52.0	102	21.3	46	9.8	22	2.2	5					
	その他	4.6	9	4.6	10	7.6	17	8.7	20					
	合計		166		216		225		229					

4.2 社会化環境

幼稚園/保育園の頃のスポーツ所属団体は、「所属していない」と回答したサンプルが50.0% (105名)と最も多く、次いで「スイミングスクール」16.2% (33名)、「地域のスポーツ少年団」13.8% (29名)、「民間の体操クラブ」10.5% (21名)の順であった。

小学1-3年生の頃のスポーツ所属団体は、「地域のスポーツ少年団」と回答したサンプルが31.9% (79名)と最も多く、次いで「スイミングスクール」25.9% (64名)、「所属していない」19.1% (48名)、「民間の新体操クラブ」8.0% (18名)の順であった。

小学4-6年生になると、「地域のスポーツ少年団」37.0% (97名)が最も多く、次いで、「スイミングスクール」「民間の新体操クラブ」15.5% (38名)、「学校の部活動」11.3% (30名)の順であった。

中学生に進学すると、「学校の部活動」58.4% (154名)が最も多く、次いで「民間の新体操クラブ」18.0% (45名)、「地域のスポーツ少年団」11.6% (31名)の順であった。

高校生では、「学校の部活動」と回答したサンプルが84.5% (200名)と最も多く、次いで「民間の新体操クラブ」8.8% (20名)、「地域のスポーツ少年団」2.9% (7名)の順であった。

これらの結果より、幼少期ではスポーツに参加しているサンプルは少なく、「所属していない」との回答が多いが、年齢期が進むごとにそれぞれの参加スポーツの所属団体に所属していく傾向がある。小学校4-6年生からは「学校の部活動」に所属するサンプルが倍増する傾向にある。(表3)

表3. 各年齢期における社会化環境

所属団体	小学生		小学生		小学生		小学生		小学生	
	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n
地域のスポーツ少年団	13.8	29	31.9	79	37.0	97	11.6	31	2.9	7
民間の体操クラブ	10.5	21	8.0	18	6.0	15	15.4	41	1.3	1
民間の新体操クラブ	2.9	5	16.2	33	15.5	38	10.0	26	8.8	20
スイミングスクール	16.2	33	25.9	64	15.5	40	37.0	97	0.0	0
学校の部活動	2.4	5	4.0	10	11.3	30	58.4	154	84.5	200
所属していない	50.0	105	19.1	48	9.1	24	4.5	12	1.7	4
その他	4.3	7	4.4	9	5.7	15	2.2	4	0.0	0
合計		205		244		267		200		202

4.3 スポーツ参加に最も影響のあった重要な他者

幼稚園/保育園の頃は、「特にいない」と回答したサンプルが58.4% (111名)と最も多く、次いで「母親」16.3% (31名)、「父親」7.9% (15名)、「兄弟」3.2% (6名)の順であった。

小学1-3年生の頃は、「特にいない」と回答したサンプルが31.4% (65名)、次いで「母親」16.9% (35名)、「兄弟」11.1% (23名)、「父親」9.02% (19名)、「部活以外の友人」6.3% (13名)の順であった。

小学4-6年生の頃は、「特にいない」と回答したサンプルが22.6% (49名)、次いで「母親」12.9% (28名)、「学外の指導者」11.1% (24名)であり、「部活仲間」が10.6% (23名)であった。

中学生の頃は、「特にいない」と回答したサンプルが21.0% (47名)で最も多く、次いで「部活仲間」20.1% (45名)、「先輩」13.4% (30名)、「学外の指導者」11.6% (26名)、「兄弟」7.1% (16名)の順であった。

高校生になると「部活の指導者」と回答したサンプルが23.7% (52名)と最も多く、次いで「先輩」20.1% (44名)、「特にいない」17.9% (38名)、「部活仲間」15.1% (33名)の順であった。

山口(1987)は、幼少期から小学3年生頃までの重要な他者は「同性の両親」や「同性の兄弟」と報告していた。だが、本研究の結果では、幼少期から小学校1-3年生までは、家族の特に母親や兄弟の影響が強く、一部先行研究と異なる結果が示唆された。また、小学校4-6年以降、家族の影響よりも部活仲間や学外指導者などの所属団体からの影響を強く受けている。(表4)

表4. 各年齢期における社会化環境

他者	小学生		小学生		小学生		小学生		小学生		小学生	
	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n
父親	7.9	15	9.2	19	9.7	21	4.5	10	3.7	8	3.7	8
母親	16.3	31	16.9	35	12.9	28	11.6	26	5.0	11	5.0	11
兄弟	3.2	6	11.1	23	10.1	22	7.1	16	2.3	5	2.3	5
姉妹	1.1	2	2.4	5	2.3	5	1.8	4	0.5	1	0.5	1
親戚(いとこ)	1.1	2	1.9	4	0.9	2	0.9	2	0.0	0	0.0	0
部活の指導者	1.1	2	1.4	3	2.3	5	6.7	15	23.7	52	23.7	52
学外の指導者	2.6	5	5.8	12	11.1	24	11.6	26	5.0	11	5.0	11
部活仲間	1.1	2	1.0	2	0.9	2	0.9	2	10.6	23	10.6	23
部活以外の友人(含む恋人)	0.5	1	3.4	7	5.5	12	13.4	30	20.1	44	20.1	44
特にいない	2.1	4	6.3	13	7.4	16	4.5	10	17.4	38	17.4	38
その他	3.7	7	3.4	7	2.6	6	2.2	5	0.0	0	0.0	0
合計		190		207		217		224		219		219

4.4 競技を本格的に始めたきっかけ

競技を本格的に始めた理由について、テレビやYouTubeなどの「メディアを見て」と回答したサンプルは66名であり最も多く、次いで「新体操からの勧誘」が50名、「先輩からの勧め」45名「部活指導者の勧め」44名、「部活仲間の勧め」43名、「母親の勧め」42名の順であった。(図1)

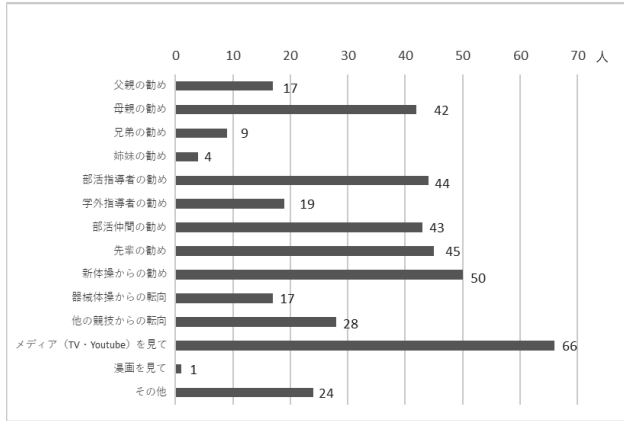


図1. 競技を本格的に始めたきっかけ

4.5 競技の魅力

競技の魅力について、「1.全く同意しない〜6.とても同意する」の6段階の等間隔とみなして平均値を算出し、各項目を平均値の検定を行った。各種目の魅力について、最も平均値が高かった項目は、「タンブリング動作」が5.79であり、次いで「男らしいダイナミックな演技・動作」5.68、「男らしい迫力とスピード感のある演技」5.64であった。これらの結果より、ジェンダー・スポーツを行っているサンプルの多くは、「ダイナミックさ」などの「男らしさ」を魅力と捉えている傾向が示唆される結果となった。(表5)

表5. 競技を本格的に始めたきっかけ

	n	mean	SD
男らしいダイナミックな演技・動作	231	5.68	.706
4種目の種目操作の面白さ	231	5.26	1.080
バク転・バク宙などのタンブリング動作	231	5.79	.577
衣装の華やかさ	230	5.09	1.126
伴奏に合わせた演技の面白さ	231	5.55	.789
繊細な演技力の追求	231	5.55	.778
グループ演技での協働作業の面白さ	231	5.42	.860
男らしい迫力とスピード感のある演技	231	5.64	.794

4.6 ジェンダー・スポーツへのスポーツ参加過程

久保(2015)の研究より、マイナースポーツでは、似た種目からのスポーツトランスファーが多いことから、スピルオーバーの概念を援用してスポーツ参加歴から、ジェンダー・スポーツへの参加過程を

まとめた。(図2)

スピルオーバーと分類されたサンプルは6.9%(n=16)、Transfer 93.1%(n=216)に分類された。ただし、Transferに分類されたものの中には、幼稚園/保育園においてジェンダー・スポーツや似たスポーツを行っており、一度それらの種目をやめ、中学・高校になって再開するといった、スポーツの社会化理論で示される、スポーツの再社会化に近い過程を経るものが少数(6.8% : n=16)いることが明らかとなった。(表6)

また、ジェンダー・スポーツにおけるスピルオーバーでも、小学校から中学校進学時期よりも、中学校から高校進学時期の方が、スピルオーバーの割合が高くなるため、スピルオーバーは学校期での運動部活動が本格的に始まる、中学校から高校への移行期に起こることが推察される。

	幼稚園/保育園	小学1-3年	小学4-6年	中学生	高校1年生
【流出 (スピルオーバー)】	体操	体操	体操	体操・新体操	体操・新体操
	体操・新体操	体操・新体操	新体操	新体操	新体操
【Transfer】	他種目	他種目	他種目	他種目/新体操	新体操

図2. ジェンダー・スポーツへのスポーツ参加過程

表6. 参加過程分析結果

項目	%	n
流出 (スピルオーバー)	6.9	16
Transfer	93.1	216
合計		232

5. まとめ

本研究の目的は、ジェンダー・スポーツに参加している男子高校生の実態を把握し、彼らのジェンダー・スポーツ参加過程と参加に至る要因について明らかにすることであった。質問紙調査により、ジェンダー・スポーツに参加している高校生の実態と、ジェンダー・スポーツ参加過程と参加に至る要因について以下の点で明らかとなった。

1. ジェンダー・スポーツへの参加過程において、流出が少数であり、マイナースポーツと同様にTransferが多い割合を占める。
2. ジェンダー・スポーツへの参加要因は、母親や兄弟の影響を受けている。また、TV

やYouTubeといったメディアを見て、興味を持ち参加に至る傾向がみられる。

3. サンプルの多くは、ジェンダー・スポーツの競技の中で「男らしさ」や男性にしかできない「ダイナミックさ」を魅力と捉えている傾向が示唆された。

今回、ジェンダー・スポーツの概要と一部の実態を明らかにすることができた。ジェンダー・スポーツを普及・振興させていくためには、TVやYouTubeといったメディアの更なる活用、また、種目の似ているスポーツだけでなく、幅広いスポーツからリクルートすることが普及・振興に必要であると考えられる。

今後、質的・量的調査を競技者及び指導者に行うことでスポーツ・マイノリティに対する偏見や固定概念の払拭、更なる指導法や振興に役立てることが可能になるのではなかろうか。

参考文献

- 飯田貴子 (2003) 「新聞報道における女性競技者のジェンダー化」『スポーツとジェンダー研究』1, 日本スポーツとジェンダー学会.
- 飯田貴子 (2011) 性的マイノリティのスポーツ参加一学校におけるスポーツ経験についての調査から一. 日本スポーツとジェンダー学会 Vol 9.
- 井谷恵子 (2001) : 井谷恵子・田原淳子編著『目で見える女性スポーツ白書』大修館書店.
- 伊藤公雄 (1999) 『スポーツとジェンダー』井上俊・亀山佳明 (編) スポーツ文化を学ぶ人のために. 世界思想社 pp114-129.
- 伊藤公雄 (2006) : 「ジェンダーで学ぶ社会学」世界思想社; 新版.
- 井上俊, 菊幸一(2012). やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ よくわかるスポーツ文化論. 初版. 京都. 株式会社 ミネルヴァ書房
- 江原由美子, 山崎敬一, 井上俊ほか編 (1995) 『岩波講座 現代社会学』
- 江原由美子 (2001) 『ジェンダー秩序』勁草書店
- エリクソン (2015) Erik H. Erikson. Identity AND THE Life Cycle アイデンティティとライフサイクル. 西平直・中島由恵訳(2015). 第4版. 東京. 株式会社 誠信書房.
- 川辺光 (1981) : わが国一流競技者の「スポーツへの社会化」に関する研究 : その1. 直接スポーツ参加に影響をおよぼす社会的要因分析. 東京外国語大学論集 no.31p.149-173.
- 久保和之, 柳承辰, 守能信次 (2015) : マイナー競技種目への社会化ー実業団ホッケー選手に着目してー. 中京大学体育学論叢. 38-2,37-43.
- 佐伯聡夫, 1997, 「スポーツ, 性的ヘゲモニーとジェンダーー問題の所在ー」, 日本体育学会編『体育の科学』47ー6, 杏林書院 404-408.
- スポーツ白書 2012 笹川スポーツ財団(2012). 青少年のスポーツライフ・データ 2012-10 代のスポーツライフに関する調査報告書ー. 東京. 笹川スポーツ財団 pp72-102
- 山口泰雄, 池田勝 (1987) : スポーツの社会化, 体育の科学 37 (2) 142-148
- 山口泰雄 (1996) : 運動・スポーツの阻害因子と対策, 臨床スポーツ医学 13 (11) : 1221-1226.
- 山口泰雄編 (1996) : 健康・スポーツの社会学. 建帛社.
- 山口泰雄 (1998) : 池田勝, 守能信次 編 講座・スポーツの社会科学1 スポーツの社会学. 第1版. 東京. 株式会社 杏林書院.
- Caroline Chimot (2010), Becoming a man while playing a female sport: The construction of masculine identity in boys doing rhythmic gymnastics, International Review for the Sociology of Sport December 2010 vol.45 no, 4 436-456
- Teuro,C (2014),Gender stereotypes as a determinant of participation in sports in childhood, Science & sports Oct2014 spplement,vol29. pS20

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

